

John Donne の“Divine Meditations”における物語

身体表象を中心に

鳥養志乃

John Donne (1572-1631) の *Holy Sonnets* の 1 つである“Divine Meditations”は、版によってソネットの総数と掲載順序が大きく異なる詩群である。現在は Herbert J. C. Grierson が発明した 19 編から成る掲載順序が主流となっているが、その掲載順序は“Each sonnets are separate meditations or ejaculation” (P. 231) の見解が元になっており、また他の掲載順序が存在していることから、“Divine Meditations”の個々のソネットは互いに独立しているように感じられる。しかし本研究では、“Divine Meditations”の作品同士には前後関係が存在しないのか、という疑問を出発点とし、精読を行った。その結果、“Divine Meditations”は、“Christ’s Blood”、“my heart/ my breast”、“eyes”、“death”、“dies”と言った身体にまつわる言葉、そして“soul”、“sins”と言ったキリスト教の身体性と関係の深い言葉やレトリックに焦点を当てることで、19 編を 3 つのグループに分類することが出来、そしてそのグルーピングを元に、全体から成る物語を導き出せると主張する。

“Divine Meditations”内における身体性の分布は、1635 年版 *Poems* を基調としている Grierson 版よりも寧ろ、1633 年版の 12 編、1635 年版追加の 4 編、Westmoreland 版マニュスクリプトにのみ収録されていた 3 編の順にグルーピングを行っている Gardner 版の掲載順序で確認を行うことで、その集中具合がよく分かる。さらに Helen Gardner は、1633 年版の 1~6 番について、“The first six [of 1633] are quite clearly a short sequence on one of the most familiar themes for a meditation: death and judgement, or the Last Thing”と、1 つのシークエンスとしての読みを提示しており (p. xl)、さらにこれら 6 編を献呈詩“To E. of D. with Six Holy Sonnets”と結び付け、“[...] the sequence on the Last Things, ‘six holy Sonnets’ beautiful and complete enough as a set to be sent to a patron, [...]”と見解を示している (P. xlix)。本研究では Gardner のグルーピング自体には別の立場を取るものの、1633 年版の 1~6 番の物語性と献呈詩との関係については、これら 6 編の間に“Christ’s blood”、“death”、“sin”、“soul”の 4 つが集中していることから支持を表明し、本研究の 1 つ目のグループとして扱う。

実際に 1633 年版の 1~6 番を先の“Christ’s Blood”、“death”、“sin”、“soul”の 4 つに着目して精読してみると、6 編を通して“death”を目の前にした語り手が (e.g. “Oh my black soul! Now thou art summoned/ By sickness, death’s herald, and champion”, “no.2” 1-2)、自身の“sin”を理由に最後の審判で地獄行きを宣言される前に、“Christ’s blood”によって自身の“sin”を贖ってほしいと願い (e.g. “[...] for that’s as good/ As if thou’hadst seal’d my pardon, with thy blood.” “no. 4” 13-14)、それが叶うことで“death”の克服と永遠の“soul”が得られる (e.g. “One short sleep past, we wake eternally/ And death shall be no more, death thou shalt die.”, “no. 6” 13-14) という一連の物語が見えてくる。これら 6 作品は、Christ と語り手の身体性を道具立てに、1 つの物語を提示しているのである。

「Sin」を自覚しながらも God の赦しによって永遠の魂を手に入れる」という物語は、キリスト教的な一つの理想を体現している。しかし、同じくパトロン獲得のため創作され、別のパトロンに献呈さ

れた同ジャンルの *Holy Sonnets* で、7 編で円環する“La Corona”が存在していたことから、Donne は “Divine Meditations”の続きを創作しなければならなかったと考えられる。実際に Donne 自身も献呈詩“To. E. of D. with Six Holy Sonnets”の中で“Seven to be bone at once, I send as yet/ But six, they say, the seventh hath still some maim”(7-8)と本来なら 7 作品であったことを明かし、6 編が“bad”(14)だと認めている。

そして“Divine Meditations”の中でも、その続きであり、物語全体を円環させる為のグループとして創作されたと考えられるのが、1633 年版の 7 番、8 番、11 番、12 番である。この 4 作品は共通して、先の 6 作品で頻出していた“Christ’s blood”と関係が深いゴルゴダの丘での Christ の死を想起させるレトリック(e.g. “I have sin’d, and sin’d, and only he,/ Who could no iniquity hath died.”, “no. 7” 3-4, “Bit theor creatpr. Whp, som. Mpr matire toed,/ Fpr is. Hos Creatures, and his foes, hath died.”, “no. 8” 13-14)が用いられている。さらにこの 4 作品は、“Father”(“no. 12”, 1)、“The Sonne”(“no. 12”, 2)、“Spirit”(“no. 12”, 11)を同一視する語り手独自の“the kottie Trinitie”(“no.12”, 2)を“wonder at a greater wonder”(“no. 11”, 11)であると強調している点でも共通している。また、永遠の“soul”を獲得する物語に対し、“thy Sonne gives to mee,/ His joynture in the knottie Trinitie,/ Hee keeps, and gives mee his deaths conquest”(HSPart, 2-4)と前後関係を持っている。この 4 作品を先の 6 作品の終わり(“no. 6”)と初め(“no. 1”)の間に挿入すると、所有の比喩(“The Sonne of glory came downe, and was slaine,/ Us whom he’had made, and Satan stolne, to unbinde.”, “no. 11” 11-12, “[...]when I was decayed,/ Thy[(=“God”)(2)] blood bought that, the which before was thine”, “no. 1” 3-4)と“love”の問題(“Thy laws abridgement, and thy last command/ Is all but love; Oh let that last Will stand!”, “no. 12” 13-4, “Oh I shall soon despair, when I do see/ That thou lov’st mankind well, yet wilt not choose me.”, “no.1” 12-3)によって物語の終わりとはまりを繋いでいる。これらのレトリックによって物語的な流れが形成され、“Divine Meditations”は 10 作品で円環しているのである。

以上の通り、本研究では“Divine Meditations”について身体表象を中心に精読することで、永遠の“soul”を獲得する物語を提示するグループ、そしてそれらを円環させるグループの読みを提示した。“Divine Meditations”は作品同士から成る 1 つの物語としての読みが可能なのである。

また、本研究では先の 10 作品が“Divine Meditations”の完全体ではないという見解によって、今後の展望を示す。“Divine Meditations”の残り 13 作品は“my hearts/breasts”や“eyes”と言った、世俗的な恋であり“sin”にまつわる身体表象が集中しており、これら作品は既存の 10 作品の前後に挿入出来るのではないかと考える。実際に、35 年版では 4 つのソネットが、1633 年版の 1~6 番の前後に挿入されている。残り 13 作品の挿入によって、永遠の“soul”獲得の物語で不明であった語り手自身の“sin”に具体性が増し、“Divine Meditations”の物語性が深まると考えられる。

引用文献

Donne, John. *The Poems of Jonh Donne*. Ed. Herbert J. C. Grierson. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1912. Print.

———. *John Donne; The Divine Poems*. Ed. Helen. Gardner. Oxford: Clarendon Press, 1978. Print.